慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アルマン モーブラン共編 フーリエ著作選集 : F. Armand et R. Maublanc; Fourier 2 Tomes. 1937. (“Socialisme et culture”Collection publie sous la direction de Georges Friedmann)
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.8 (1937. 8) ,p.1191(91)- 1205(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19370801-0091
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370801-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルマン モーブラン共編『フーリエ』著作選集

——F. Armand et R. Maublanc ; Fourier. 2 Tomes. Paris, 1937. (“Socialisme et culture.” Collection publiée sous la direction de Georges Friedmann)

平井新

（一）

社會主義的天才シャルル・フーリエが「ファランジュ」實現の念願を資金提供者の萬一の出現に賭けて、遂に成らず、空しく焦燥と困憊と孤獨と窮乏の裡に六十有五歳の生涯をパリに閉じて以來、本年は丁度百年になる。彼は一七七二年四月七日ブサンソンに生れ、パリに死んだのは一八三七年十月十日であつた。フーリエはバブーフの如く何等の謀叛をも煽動しなかつた。彼は「人生の全旺盛期を出來る限り、最も創造的に、最も活動的に過ごせ」といふサン・シモンの訓にも從はず、又彼の如く所謂「お偉い人」の生涯をも送らなかつた。彼はロバート・オウエンの如く大慈善家としての名聲を博せず、又彼の如く諸王侯に謁見を賜はることもなかつた。カベエの如くイカリヤ共和國の建設にアメリカにも渡らなかつた。ラッサルの如く冒險的の生涯と劇的な最期によつて世人を眩惑させることもなかつた。更にマルクスの如くインタアナショナルの首領でさへなかつた。否それどころか、彼は凡そ考へ得る限

りに於て最も平々凡々なる生涯を送つた。フーリエは生涯娶らなかつた。筆者は曾てパリの北モンマルトルの墓地にフーリエを訪ねた事があつた。訪ふ人も無きと見え、漸く探し當てた墓碑は荒廢に委せ、墓碑面に刻まれた有名な La serie distribue les harmonie. Les attractions sont proportionelles aux destinées の文にも深く苔蒸して讀み辛かつたことを思ひ起す。

嘗てカルル・カウツキイはその著『カルル・マルクスの經濟學說』の冒頭に獨逸詩人レッシングの

『誰かクロープシュトックを褒めないものがあるであらうか。
併し誰もが彼を讀むであらうか。
吾等は褒めらるゝ事尠く
讀まるゝことの多きを望む』

といふ言葉を引用して、マルクスの名の徒に持囃されて、その著作の餘りに讀まれず、理解せられざることを歎じたことがある。この歎きは獨りマルクスに就てのみでなく、更に一層適切にフーリエに就ても言へる。フーリエを想起す毎に此感が深い。

事實、フーリエは褒めらるゝどころか、世人の嘲笑と冷罵を浴びた。嘲罵と冷笑とは強ちフーリエに限らず、凡そ總ての社會思想家に免かれ難き運命として敢て異とするに足りないが、フーリエの場合はそうではない。彼は實に不當の嘲笑と冷罵とを總身に浴び、剩へ狂人視せられて世を去つた。而して是等の非難は、彼の諸作を渉獵味讀して、體系の核心を把握するの勞を取らず、屢々引用せらるゝ『海水は變じてリモナードとなり、黑人は白色と化し、有益なる動物は有害なる動物に化して人間を海陸に運搬するであらう』の如き類ひの片言雙句を竝し來つて、彼の全豹を斷ぜんとするが如き輕擧に由來するものであつて、寧ろ却て誹謗者自身の不學と不理解とを暴露するものである。例へば Louis Reybaud の如く奇矯なる片言隻句を拾綴してフーリエのカリカチュアを作る事は頗る容易である。然らば何故に讀まれず、理解されないか。一方に於て、彼の著作は浩瀚で、渉獵が容易でなく、他方に於ては、佶屈聱牙、殊に彼獨特の造語は讀者を辟易せしめ、加ふるに構想頗る雄偉にして、特異と變化に富み、人をして其核心を捕捉するに困難ならしめる。シャルル・ジードは嘗て彼の著作を評して『事實是等の尨大なる書物を一見すると、目次も無ければ丁附も連續して居らず……或頁は論旨半にして突然に說明が變り、而も其頁は恰も植字工がそのケースに入てゐる活字を悉くぶちまけたかの如く見え、又XやYの字が紛れもなくサラバンド踊をやつてゐるやうに或は直立し或は横倒れになり或は逆まになつてゐる。總て斯樣なものは極めて架空的な時代に書かれた妖術者の魔法書の如き印象を與へる』(1) と言つてゐるのは聊か誇張の嫌はあるが、此等の消息の一班を傳ふるものである。

(1) Charles Gide: Introduction en Pages choisies de Charles Fourier. Paris 1932. p. XII-XIII

マルクスが自らの社會主義に「科學的」の名を冠し、爾餘の社會主義を一般に「空想的」と呼んだ事は遍く人の知る所であるが、分けてもフーリエは空想的社會主義の曲型の如く看做されてゐる。此「空想的」なる言葉には其本來の意味の外に、かく指稱する人の獨善的、排他的、侮蔑的意味が含まれてゐることは明かである。「空想的」は「科學的」に對し夫々正反對極に立つと解せらるゝが故に、マルクスは「科學的」の名によつて動こもすれば過當の評價を受け、之に反して所謂空想的社會主義者は「空想的」の名によつてそれ丈け不當に低評價せられ終るの不利を課せられてゐる。フーリエの如きは斯種「被害者」の最なるものである。

成程フーリエは稀に見る逞しき想像力の持主であつた。その不羈放膽なる想像力の赴く所、文字通り天馬空を行くの慨があり、シャルル・ジードの如きは彼をエドガア・アラン・ポーに比してゐる。しかし之は固より彼の全面ではない。他面にはそれ丈け冷徹、深刻且つ犀利なる現實的認識の嚴存せる事實を看過してはならぬ。否、茲にこそ彼の眞骨頭は存在する。自らの社會主義を「科學的」と誇稱し、他を「空想的」と呼んだ例は、何もマルクスに始まるものではなく、實はフーリエ共人が手始めである。フーリエは自己の體系に空想を導入することを極力警戒する。彼によれば、自己の發見は嚴密なる數學的計算、最も實證的なるものの豫測の上に基く。彼は自說を極めて科學的のものと思惟し、之を嚴密科學の中に加へる。彼は神秘主義に囚はるゝ事なきやう勸告し、退嬰的革新を說く哲學者及び他の社會主義體系――共產主義、オウエン主義、サン・シモン主義――を痛烈に批評したが、彼によれば是等の體系は孰れも空想主義に充溢し、煉金術が化學から遠く占星術が星學から遠く、魔術が物理學から離れてゐるが如く、眞正の科學から遠く離れてゐるものである。フーリエに次いで、「空想主義」の言葉を投げかけたものはプルードンであつた。次いで始めてマルクスが來る。マルクスが自說を「科學的」と呼び爾他を「空想的」と呼んだのは言はば、フーリエ、プルードンの故智を學んだのである。とまれ、フーリエの所謂「空想的」社會主義が必ずしも「空想的」に非ざる事恰もマルクスの「科學的」社會主義に少なからざる空想的者が含まれてゐるが如くである。

（二）

フーリエの體系中特に彼が現實的認識の敞眼と犀利とを思はしむるものは、その現代經濟社會の批判的分析である。『フーリエは現在の社會關係を非常な鋭さと、奇智と諧謔とを以て批評したのであつた』（エンゲルス）その資本集中論、貧窮革命論は夙にマルクス、エンゲルスを驚駭せしむる。而も此事がマルクスを去る數十年以前の事と思へば驚歎の外はない。商業批判は彼の獨壇場であり、婦人問題は他の追隨を許さない。フーリエの歷史觀が辨證法の基礎の上に立つてゐると言へば、人は之をためにする附會の言として怪しむかも知れぬ。しかし事實、フーリエは辨證法の體得者であつた。此點についてエンゲルスの「反デューリング論」の一節を引くことを許されたい。曰く『フーリエの最大の點は社會史觀である。彼は今日迄の社會の全過程を蒙昧時代、野蠻時代、家長時代及今日の所謂ブルジョワ社會に相當する文明時代といふ四つの發展段階に分けて、次のことを論證してゐる。即ち「文明社會は野蠻時代に於て單純に行はれて居た各種の惡德を複雜な、曖昧な、意義不明な、僞瞞的な存在物に作り上げる。」又文明は「惡循環」を以て、即ち自ら絶へず新に生み出し乍ら遂に克服し得ない所の矛盾を以て運動すること、從て文明は常に、自分が到達せんと欲してゐる又は到達せんと欲して居る振りをしてゐる所のものの反對に到達するといふ事之である。かくして例へば「文明時代に於ては惡饒、過多そのものから貧困が發生する」。

斯くしてフーリエは同時代のヘーゲルと同じく最も巧妙に辨證法を使用してゐる。彼はその同じ辨證法を用ひて、人間が無限に向上するといふ世論に反對し、總ての歷史的段階がその上昇期を有すると共に又その下降期を有することを力說し、そしてかゝる考へ方を全人類の將來にも適用する。カントが地球の究極的破滅といふ考へを自然科學の中に導入せしと同樣に、フーリエは全人類の究極的破滅といふ考へを歷史觀の中に入れた』と。(1)

（1）Engels; Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. S. 278-279

フーリエのマルクス、エンゲルスとの關聯について一言しやう。

フーリエはマルクスにもエンゲルスにも大なる影響を與へてゐる。マルクスは一八四二年十―十二月頃初めてフランス社會主義者の著書に接し就中プルードン、デザミ、ルルー、コンシデランを讀んだと言はれてゐる。(1) フー

リエの名は擧つてゐないが、コンシデランを通じて之を識つたであらう事は容易に推測される。更に一八四二年出版のシュタイン著「現代フランスの社會主義及共産主義」によつてマルクスがフーリエの體系を知つた事は茲に贅する迄もない。マルクスは「神聖家族」その他の著作に於て、自己の見解を確證するために屢々フーリエを引用してゐる。フーリエのブルジョワ社會の結婚及家族に對する批判はマルクスによつて名工的と呼ばれ、敬[illegible]する見解はマルクスによつて「この領域に於て存立する最良のものであり、最も天才的なる觀察を藏してゐる」と言はれてゐる。一八四五年マルクスはエンゲルス及ヘッスと共に「第十八世以降のフランス及イギリス社會主義並に共産主義史」に關する叢書出版の意を有しブオナロッチ、フーリエ、ゴトウン、オウエン、マブリ、モレリイその他の飜譯を、編者の詳しい序論又は原文註釋の別冊を附して、此叢書中で出す事を計畫してゐたが遂に出版書肆の都合にて實現されなかつた。フーリエに對する關心と造詣が窺はれる。マルクスがフーリエに通曉せる事は前記の著作の外殊に「ドイツ・イデオロギー」（一八四六年）「共産黨宣言」（一八四八年）「資本論」（一八六七年）等の中に容易に見出される、又エンゲルスは夙に「商業に關するフーリエの一斷片」（一八四五年）に於て「眞正社會主義」に對してフーリエを對立せしめ、その體系の獨創、警拔なることを禮讃し『獨逸社會主義者が若しフーリエの著作を讀むならば如何に豐富なる新思想が彼等の前に提供せらるゝ事であらう。』と述べてゐる。又フーリエの商業批評を稱揚し『ワイトリングを除いて獨逸社會主義者の誰一人として此稿に少しでも類似せるものを決して書いた事はなかつた』(1) とも言つてゐる。『反デューリング論』に於けるフーリエ批評については大要既に述べて置いた。又マルクス、エンゲルスのフーリエに負ふ所如何に大なるかは其共著『共産黨宣言』が、流説にしろ屢々最大のフーリエ主義者ヴィクトル・コンシデランの『社會主義原理』の剽窃呼ばわりを受けてゐる事實に徵しても明かであらう。

フーリエの影響は尙ほ協同組合思想、欲望の心理學、勞働の快適化等幾多の方面に亙て存在するが、茲では之等に就ては述べない事とする。

（1）エンゲルス「商業に關するフーリエの一斷片」邦譯マルクス、エンゲルス全集第三卷三九一―三九六頁

（三）

フーリエの著作は既に述べた如く頗る浩瀚である。『彼は商務に忙殺され乍ら、驚く程よく書いた。實にタイプライタアの如き正確さで毎日幾枚となく書いた。』（ジード）茲に彼の著作を出來る丈け分り易く羅列して見やう。

（一）先づ普通形單行本として

1) Théorie des quatre mouvements. 1808

2) Traité de l'Association domestique. agricole. II vols 1822. 本書は又一八四一年に Théorie de l'unité universelle の表題の下に四卷として再刻せらる。

3) Nouveau monde industriel et sociétaire. 1829

4) Fausse industrie. 2 vols. 1835

5) Manuscrits. 4 vols. 1851-1858

（二）小冊子類を擧ぐれば

1) Les charlataneries commerciales. 1807

2) Sommaire de la théorie d'association domestique-agricole ou Attraction industrielle et sommaire et annonce du Traité de l'association domestique-agricole. 1823

3) Additions aux Sommaires et au Traité.

4) Mnémonique Géographique. 1824

5) Livret d'annonce du Nouveau Monde industriel. 1830.

6) Pièges et charlatanisme des sectes Owen et St-Simon. 1831.

7) L'Anarchie industrielle et scientifique 1847.

8) L'Egarement de la raison 1847.

9) L'Analyse du méchanisme de l'agiotage 1848.

10) Sur l'esprit irréligieux des modernes et dernières analogies. 1850

11) Les cité ouvrières

(三) 新聞、雜誌の論文

フーリエは初め次の雜誌に寄稿した。

1) Journal de Lyon et du Midi (1801-1802)

2) Journal de Lyon (2. Dec. 1803-4 févr. 1804)

3) Le Bulletin de Lyon

4) Le journal de Lyon et du département du Rhône

5) L'Impartial de Besançon

尙ほ Phalanstére (La Réforme industrielle), La Phalange には殆んど毎號寄稿してゐた。寄稿論文の題目は玆に省略する。此外に未刊の原稿と少數の通信がある。

一八四一―一八四五年に全冊六卷の全集、Oeuvres complètes de ch. Fourier 6 vols が出版されたが、本全集は表題の示すが如き、彼の全著作を網羅したものではない。第一卷は Théorie des quatre mouvements, 第二卷―第五卷は Théorie de l'unité universelle 第六卷は Nouveau monde industriel et sociètaire となり、別項に掲げた其他の著作論文は收錄されて居ない。

フーリエの著作選集には種々ある。先づ一八九〇年、ギョーマン書房から "Petite collection des Économistes" の一冊として刊行されたシャルル・ジード編纂の "Oeuvres choisies" を擧げねばならぬ。ジードがフーリエの體系中協同組合思想の熱心なる信奉者である事は人の既に知る所である。卷頭長文の序文はフーリエ研究者必讀の文字である。同書の第二版は一九三二年 "Charles Fourier, Pages choisies" と改題してシレイ書房より出版せられた。ジードの序文六五頁、テキスト一三二頁である。新版はジードの序文に僅少の變更が加へられたるのみでフーリエのテキストには何等の變化もない。協同組合思想にのみ重心を置いたためか、ジードの解說は新味と生彩に乏しい。次いで Hubert Bourgin 編纂の小冊子 Le socialisme sociètaire, Extraits des oeuvres complètes. 1903. 200 p. (Bibliothèque socialiste N. 18-19) がある。編者フールジャンは "Fourier; contribution à l'étude du socialisme français 1905. 620 p. の著者としてフーリエ研究の權威者である。

Charles Fourier; Der sozietäre Reformplan. Textübertragung und Einleitung von H. Thurow. Basel, 1925 216 Seiten. 本書は "Pioniere und Theoretiker des Genossenschaftswesens" の第三卷として出版されたもので Thurow の協同組合思想を中心として觀た三三頁の序文と、約一八〇頁のフーリエのテキストの獨逸譯がある。序

文の末尾にある文献目次は便利である。

"Fourier" par E. Poisson 1932. (Réformateurs sociaux) 本書は『社會改良家叢書』の一卷としてポアソンの編纂したもので同氏の一三頁の序文とフーリエのテキスト約一二〇頁の小冊子である。

選集として一寸變てゐるものは "A. Pinloche; Fourier et le Socialisme 1933" である。本書は選集と言ふよりも寧ろパンロッシュの研究にフーリエのテキストを附錄としたものといふべきが適當であるかも知れぬ。パンロッシュはリイル大學名譽教授其他學界の榮職にある人、彼は本書でフーリエと社會主義殊にマルクシズムとの關係を取扱ひ、フーリエのテキストの外にマルクスの「共產黨宣言」の一部をもテキストとして附加してゐる。全頁一九五。かく觀るとフーリエの選集も中々尠くない事が分る。

（四）

「フーリエ」著作選集として最も新しいものは茲に紹介する F. Armand et R. Maublanc; Fourier 2 vols. Paris, 1937 ("socialisme et culture." Collection publiée sous la direction de Georges Friedmann) である。編者の一人アルマン氏については筆者は唯一九二九年 Revue d'histoire economique et sociale に寄せた "P.-J. Proudhon et le Fouriérisme" なる論文の筆者として以外には知る所がない。右論文は七〇頁に亘る長篇で、プルードンとフーリエに對する非凡なる造詣を示すものとして、筆者は豫て注目してゐた。フーリエ選集編註の好適任者を得たといへやう。編註者の他の一人モーブランとは如何なる人物であるか。彼はフランスに於ける新進の唯物論哲學者であり、新ロシヤ・サークル科學委員會 (la commission scientifique du Cercle de la Russie Neuve) の一員として同會の出版物 "A la lumière du Marxisme" の第一部に「哲學と技術」なる論文を寄稿し又近く「社會主義と文化」叢書の一冊として『エルヴェシュース』を公刊するといふ。モーブランの立場が大體コムミュニストのそれに近い事が窺はれる。本選集は上記兩氏の編註により、ジョルジュ・フリードマン監修『社會主義と文化』叢書の一部として最近刊行されたもので、上、下二冊、第一卷、二六四頁、第二卷同じく二六四頁から成る。第一卷には兩編者の二百余頁に亘る長文の解說序文が附せられ、從てフーリエのテキストは第一卷第二卷合せて約三百二十餘頁に亘る譯である。

曩に述べたるが如き兩編者の閲歷、傾向よりして本選集刊行の意圖が那邊に存するか又その解說の內容が如何なるものであるか、更にフーリエを如何に現代社會の焦點に合せやうとするか略〻その見當がつくと思ふ。

編者は、體系を育成した物質的背景の重要性を忘れず、先づ一七八九年より一八三〇年に至るフランスの經濟的情勢の敍述に筆を起し次いでフーリエの生涯を略述し、ユトピヤ生誕の素地を說明し、更にフーリエ體系の全般について素描し、終りにフーリエの現代的價値、即ち彼の體系の現代に生けるものを求むる。二百余頁に亘る解說序文を通じて窺はれる編者の意圖は、要するに、從來兎角、死せるもの、骨董品として閑却せられ勝ちであつたフーリエの體系を現代の脚光によつて新に再檢討し、その尙ほ生けるもの、生くるに堪へ得るものを摘出し、彼の現代的意義を新に決定すると共に、これ迄のフーリエ研究に於ける二三の疑義を明かにせんとするものである。吾人は茲に從來の研究に曾て見ざる新味と新解釋とを發見する。茲には讀後印象深かつた事實に就てのみ述べる事とする。

編者の言ふ所によれば、フーリエの在世當時世人の嘲笑を買つた幾多の豫言が今日既に實現を見てゐる。交通の高速化、砂漠の利用、テレヴィジョン、新種動植物の創造、スエズ及パナマ運河の開鑿等之である。

今日生產及消費組合の異常なる發展は一般にフーリエに負ふものであることは協同組合運動の使徒シャルル・ジードの高言せる所である。

婦人の經濟的解放、國際語運動、田園に歸れの宣傳、田園都市の提唱の中にもフーリエの思想の痕跡を見出す事は容易である。又自由教育、ateliers-écoles, école active, jardins d'enfant 等の近代教育思想についても亦同樣である。その創始者 Froebel はペスタロッチの影響と共にフーリエの感化を受くることが尠くなかつた。

フーリエは屢〻改良主義者と目されてゐる。ジード、Hubert Bourgin, C. Bouglé 等の意見がそうである。併しその外見に不拘、フーリエは實際に於ては寧ろ改良主義者の正反對であつた。彼は文明の姑息的、彌縫的矯正を好まず常に社會の全體的、根本的變化を求めた。然らば彼は革命家であるかといふに、彼は暴力を恐怖した。從て革命をマルクス的に解する限りに於ては決して革命的ではなかつた。彼は人類の救濟を宣傳と範例とに期待し、決して暴力に求めなかつた。彼がユトピヤンなる所以は茲にある。然し乍ら、彼は現制度の部分的改良、緩漫なる改善を排除し、全社會の根本的且つ急速なる變更を求めたといふ意味に於ては依然革命的であるといふ事が出來る。總てのものを悉く變へなければならぬ。然からざれば何物をも變はらない。これがフーリエの眞意である。茲にフーリエとブルードンとの本質的相違が在り、茲に又ブルードンに對するフーリエの優位が在る。

かくて編者は其得意の領域たるフーリエとブルードンとの關係に就て述べる。それによればブルードンはその抗言に不拘、多くのものをフーリエに負ふてゐる、兩者の中でより革命的であり、より少なく空想的であり、より豐富で且つより深いものは、言ふ迄もなくフーリエである。事實フーリエの影響はブルードンが自ら告白する以上に深い。ブルードンはフーリエの社會批評に何物も附加しない。唯フーリエ以上に論理的なる彼が之を整理し、且系統化せしにすぎぬ。ブルードンの無政府主義はフーリエに得たものである。

マルクス、エンゲルスも亦フーリエに負ふ所が頗る多い。彼等に對するフーリエの影響は多くはペクール、ルーゲ、ワイトリングを通じて來たものである。『共產黨宣言』が社會革命の方策として掲てゐる所の『生產要具の增大、一般的計畫による未耕地の開墾、耕地の改善、產業軍隊の組織、農業勞働と工業勞働との結合、都市と農村との差別漸廢、兒童公共無料教育、兒童の工場勞働廢止』等の要求は特にフーリエ的思想である。更に資本論に於ても亦フーリエ近似の思想、フーリエ獨特の用語の使用せられてゐる事は少くはない。

この解說中興味ある部分として特に筆者の注目を惹いたのは編者がフーリエと現ソヴィエトとの關聯を指摘した部分である。

編者の說く所によれば、先づソヴィエトにとつても、フーリエにとつても社會問題解決の秘鍵は經濟的である。その直次の目的は經濟的生產を增大することであり、其究極目的は萬人の完全なる、調和ある、而も自由なる發展の保證である。兩者の基調をなすものは社會主義的經營のみが、かの文明が自ら造出し乍ら之を制御し得ない所の尨大なる生產を可能ならしむるといふ思想である。此新生產力はファランステールに於ては單純なる調和より複合調和への移行を可能にするが如く、ソヴィエトでは資本主義秩序より社會主義秩序へ、社會主義秩序より共產主義秩序への轉移を可能にする。何れの場合に於ても新社會移序は萬人のために欲望を累增せしめ、豐富と快適と奢侈とを普及せしむる。

ファランステールは合理的計畫による大規模經營、諸企業の排列、機械の使用による人間勞働の輕減、技術と科學との協力、農業生產及工業生產に於ける方法の畫一、即ち都市と農村との差別の撤廢を必要とした。ソヴィエトの現實はかゝる夢想に充分答へる。フーリエ若し存命ならば、ソフォーズ及コルホーズに於て彼がファランステールの近代的姿を見出すであらう。ドニエプロストロイ、トウルクシヴ、白海—黑海の運河、ステップ又はタイガ

の上に建設されたウラル、シベリヤの大工業はフーリエの念願に答へる。オレンヂがラポニヤ地方に實るといふフーリエの豫言は眞實でなくても、寒氣抵抗の新方法により、ソヴィエトに於ける葡萄及穀物栽培の限界が高まつた事は人の知る所である。極地農業も不可能ではなくなつた。

資本制社會に於ては、技術の進歩が常に勞働階級の隷屬を惡化するのが常であるが、調和社會に於てもソヴィエトに於ても、技術的進歩は彼等をそれ丈け解放する。資本制社會では勞働の如何なる自發性も、喜悅も熱意も不可能である。フーリエが說いた集合的熱意たる "composite" は今日ソヴィエト・ロシヤの顯著なる特長の一つとなり又フーリエの "cabaliste" は同じくソヴィエトに於て「社會主義競爭」なる名目の下に同じく緊要なる役目を力めてゐる。スタハノフ運動はその顯著なる表明である、フーリエの "athlètes industriels" "champions agricoles" はソヴィエトに於てはウダルニクとなりスタハノフ運動の鬪士となつた。

勞働の組織と同じく文化的組織も亦ソヴィエトに於てはファランステールに於けると均しく、"cabaliste" と "composite" とを其本質的原動力としてゐる。双方の場合に於て文化は最早や富有なる「選良」の獨占物ではない。それはもはや人間の間に障壁を設けない。藝術・スポーツ・敎育は社會の諸關係を緊密ならしむるに貢献する。科學と技術とは密接に協力する事となる。

ファランステールは婦人を、家事、子供、夫への總ゆる隷屬から解放し、夫と同等ならしむる。ソヴィエトはフーリエが單に夢想してゐた婦人の解放的事業を實現した。一九一七年の革命前に於ては讀み書きの出來る婦人は全婦人數の僅に二パーセントにすぎなかつたのに、今日に於ては有資格醫師の半數以上は婦人といふ有樣であり又指導的地位にある婦人も決して尠くない。

然し乍らソヴィエトに於てはかゝるフーリエ的夢想の實現は、勿論フーリエが望んだ如き平和的方法によつては行はれず、彼が恐怖し、嫌惡した暴力により、流血の革名によつて成就された。フーリエをユトピヤンたらしむるものは、新社會に對する彼の幻想ではなく、社會の全面的變化が宣傳と範例によつて可能であるとの彼の信念にある。フーリエのユートピヤは、革命的なる彼の目的と平和的なる彼の手段との矛盾の中に在る。彼はその目的に於ては正しかつたが、その方法を誤つた。フーリエのユートピヤに對して正しいものは、其目的に於ても、其手段に於ても革命的なるマルクシズムであると。

以上は解說序文中特に印象的なる部分を其儘紹介した迄の事である。說明する迄もなく編者がコムミニスト的見地に立つてゐる事は容易に看取せらるゝであらう。編者が所說の當否は姑く措かねばならぬが、兎も角、曾て見ざる、潑剌たる、暗示に富めるフーリエの新解釋であることは疑ひない。無智の空想家として、今日殆ど顧みらるゝことなきフーリエは今茲に、理解ある編者の脚光を浴びて、再び現代人の關心の前に浮び上ることとなつた。筆者は久しくフーリエに興味を有つものであるが、本解說によつて啓發せられし事多く、フーリエ再吟味の必要を痛感するものである。解釋並に考證の當否は別として、本解說が今後のフーリエ研究に對して新しき指針と幾多の示唆とを與ふるものであることは疑ひない。本選集は慥にフーリエ研究に一大波紋を投じたものであらう。筆者は之によつて兎角無味乾燥なるフーリエ研究が幾分なりとも救はれた事を喜ぶものである。敢て紹介の勞をとる所以である。